

第1回台東区都市計画マスタープラン策定委員会 会議録

日 時	平成28年8月10日(水) 午後3時00分～午後4時45分
場 所	台東区役所4階 庁議室
出席者	【委員長】野澤委員 【委員】加藤委員、中島委員、茅野委員、松本委員、松田委員、梅澤委員、本間委員、伴委員、高柳委員 【事務局】都市づくり部都市計画課：望月課長、村上係長、藤田主事
議 事	○ 都市計画マスタープランの方向性について
配付資料	台東区都市計画マスタープラン策定委員会委員名簿 台東区都市計画マスタープラン策定委員会設置要綱 資料1-1 都市計画マスタープランの方向性について 資料1-2 都市計画マスタープランの方向性について(資料編) 資料2 台東区の将来都市像に関する調査について 台東区長期総合計画 台東区行政資料集 台東区都市計画マスタープラン
会議内容	
<p>1. 開会(省略)</p> <p>2. 委員長選出 【事務局】委員長については、学識経験者の委員のうちから委員の互選により定める。事務局としては、野澤委員を委員長に推薦したい。 【委員全員】(満場一致の拍手) 【事務局】それでは、野澤委員に委員長をお願いします。</p> <p>3. 委員長挨拶 【委員長】お暑いところお集まりいただきありがとうございます。私自身は台東区の仕事は初めてで、観光で浅草に遊びに行くくらいしか接点がありませんでした。先月区の方の案内で一通り台東区のまちをご案内いただき、認識を新たにしましたところでございます。都市計画マスタープランは区の都市計画の基盤となるものであり、これからの20年間の目指すところを書いていくところです。活発なご議論をいただきながら、よりよいマスタープランを作っていきたいと思っておりますので、ぜひご協力をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。</p> <p>4. 出席状況及び定足数の報告 【事務局】定数11名のうち、12名が出席している。従って、本委員会は成立していることを報告する。 (資料の確認) 【委員長】傍聴者はないか。 【事務局】傍聴者はない。</p> <p>5. 議事</p>	

(1) 都市計画マスタープランの方向性について

【事務局】(資料1-1及び1-2、資料2説明)

【委員長】まずはスケジュールについてご意見、ご質問をお願いしたい。

【委員長】会を進めると第4回、第5回は記載通りに行かない可能性があり、議論が足りない部分を後半で埋めていくかもしれない。ご了承いただきたい。

【委員長】それでは資料1-1、3ページについて、ご意見、ご質問をお聞きしたい。この部分はプランの前提条件となる現況と課題部分となる。

【委員】「自転車の利用環境の向上」について、御徒町駅周辺の違法駐輪が問題となっている。おそらくどこの駅も同じ状況と理解している。利用促進のみならず、対策についての検討が必要である。

【委員長】自転車の利用環境の向上には、違法駐輪、駐輪場の整備、そして最近話題になっている走行環境の整備なども含まれるという理解でよろしいか。

【事務局】現行都市マスの道路交通整備方針のうち、30～31ページの「歩行者・自転車空間の整備」③、④に記載がある。しかし10年前と比べて状況が変わった部分もあるため、現状や交通施策の状況を勘案して検討する予定である。

【委員】自転車以前に、歩道整備をお願いしたい。台東区はコンパクトシティを目指すべきである。歩けるまちづくりの概念を入れてほしい。

【委員】まず一点目。2020年東京オリンピックが開催される。新都市マスはオリンピックの後の話も語る必要がある。次に二点目。どうしても従来の道路整備などのハード施策が都市マスの中心になる傾向があるが、これからは人を中心に切り替えていかないか。マンション建設やそれに伴う人口増加により、旧住民と新住民が対立し、従来の下町のコミュニティが薄れていく恐れがある。こういう状況の中で都市マスを策定しても、住民との連携が取れない可能性がある。まちづくり推進のプロセスが箱もの中心や行政中心から住民中心にシフトする方向で、大きな舵を切っていただきたい。

【事務局】資料1-1、4ページの基本方針に「まちづくり施策の視点について、都市基盤の整備のみならず、街の質や機能の向上の視点についても付加」という記載がある。この部分と関連してご指摘を反映したい。

【委員】資料1-1、3ページの台東区の都市としての魅力は、今まで何もやらなくても何とかなっていたところがある。それが今までの台東区の都市計画の特徴と考えている。ところが、気がついたら意図しない変化が起きている。観光客の増加などプラスの変化もあるが、マンション建設による新住民と旧住民の共存問題、ものづくりの技術継承問題などのマイナスの変化もある。台東区はものづくりのまちといわれているが、革ジャンを買うために浅草に行ったら売り物の大半が韓国製であった。はたして若手の職人が作っているか、高齢の職人が作っているだけで、技術が継承しないのではないかという懸念がある。こういう状況があるにもかかわらず、昔の幻想を引きずって決めつけているように読めなくもない。変化の中では、元に戻せるもの、戻せないものがあると思う。戻せないものは戻せないとしても、未来の台東区らしさとは何かについて議論して共有したい。右肩上がりの時代は箱さえ作れば中身が勝手に埋まったが、今は中身をどう埋めるかの方が重要で、だから人間に焦点を当てる必要がある。

【委員】台東区のイメージは浅草だけではない。隅田川も台東区にとっては重要な資源である。世界中の都市をみても、リバーサイドのあり方について認識が変わっており、川を戦略

的な都市の資源として活用し、川沿いだけでなくまち全体を変えていこうとする動きが活発である。まちづくりの課題のポイントの「文化・産業・観光など、個性を活かしたにぎわい形成に資するまちづくり」に隅田川の話も記載したらどうか。

【委員 長】資料1-1、7ページの地域区分で、川沿いの地域区分を外した理由は何か。

【事務局】重点地区には隅田川が入っていないが、地域別整備方針の中で水の拠点として入っている。地域別整備方針を検討する時に併せて検討したい。

【委員】現行都市マスの106ページに記載がある。

【委員】「にぎわい いきいき したまち 台東」と掲げ、下町らしい人情を重視する台東区としては、地域コミュニティの維持・再生が重要と考える。ちょっと前までは人口の25%が旧住民であったが、今は20%に留まっており、今後も減少すると予想する。ただ、町会の役員は20%の旧住民に偏っており、高齢化が進んでいる。都市計画の中でも下町らしさ、地域コミュニティのあり方などについて検討してほしい。それから、10年前と比べて少子高齢化が進展している状況を勘案すると、福祉についても都市計画の中でふれる必要がある。例えば、部門別整備方針の中に福祉を追加するなどである。周辺に高齢者が増えたことを実感する。10年前は敬老会で高齢者が把握できたが、今は個人情報保護につき町会で名簿が作成できないため、実態が把握しにくくなった。このような状況で地域コミュニティを維持するのは困難である。福祉、コミュニティのことを少し掘り下げてほしい。

【委員 長】福祉について課題に書くのは難しいことではないが、問題は従来の都市マスの殻を破って反映することがどこまでできるかである。都市マスは台東区基本構想、台東区長期総合計画の中の一つの部門としての位置づけもあるため、書きすぎると上位計画との整合が取りにくくなる。一方、縦割り行政を改善したい気持ちもある。コミュニティ、福祉は重要な課題であるが、「福祉施策の充実」と直接詳細を記載せず、議論して実態を掴みながら都市計画分野でできることに置き換える作業が必要である。

【委員】立地適正化計画の検討の際にも同じ課題があり、なかなか難しいと感じた。議論しながら何が入られるかを決めていきたい。

【委員 長】人や生活の議論をした上で、必要なインフラやハコは何かをきちんと議論しなければならないと理解した。

【委員】単にまちをつくる視点だけでなく、いろんな方面に有機的に絡んでくる。例えば、観光客を積極的に受け入れるまちづくりを推進すると、住民との軋轢が生じる可能性がある。住民参加がしやすいルールが敷けると、コミュニティが復活できるのではないか。コミュニティの復活は官民連携を含む様々な問題解決の可能性を秘めている。

【委員】祭事、伝統行事は観光のみならず、コミュニティにおいても重要である。これらは空間とも密接に関係しており、だんだんやりにくくなっている現状がある。台東区の道路や公園を祭事、伝統行事に活用しやすくすることは、新旧住民のアイデンティティの共有にも役立つ。このように具体的なターゲットを決めて、都市マスに反映することにより、台東区らしさが増すのではないか。

【委員】平成18年以降の景観計画では、お祭りを景観資源として位置づけている。このような状況を踏まえて検討したい。

【委員】昼間人口減少と夜間人口増加は、働く場所から住む場所にシフトすることを意味する。働きやすいまち、住みやすいまちのどちらを目指すかを定めることは重要である。

【委員 長】議会や総合計画策定に向けた議論などで、このような話はあったか。

【委員】人口についての議論はあるが、人口と関連したまちづくりとしてのあり方の議論はなさ

れていない。

【委員】働きやすいまち、住みやすいまちは地域によって異なるため、一概にはいえない。

【委員】広域型商業地（上野、浅草）、近隣型商業地、業務地、住宅地が混在している状況である。今回はブロック別の現況を把握しているため、特に重点地区にそれらの結果が反映できるといい。

【委員】この地域に住むということは何か。谷中で住むライフスタイル、御徒町で住むライフスタイルと併せて、台東区で住むライフスタイルの議論も必要である。

【委員】台東区の場合、浅草の北側は耐震性が低く、谷中は延焼火災の危険性が高い。東京都の不燃化の取組みもあるが、それでいいか疑ってかかる必要がある。結局のところ、建物が老朽化して建て替えが進まないことが防災の問題を生み出している。もう一回実態を丁寧にみる必要がある。荒川区の場合、建て替えがなかなか進まないとされていたが、実際はこの10年間でかなり建て替えが進んだ。昭和30年後半に人口がピークを迎え、その後は世代交代で建て替えが活発な状態に転じた。台東区の場合も、5年後自然発生的に建て替えが促進される場所もあるかもしれない。このような地域ではチャンスはどう活かすかという視点で議論する必要がある。5年後も建て替えが促進される見込みがない地域に対しては、対策を検討すべきである。

【委員長】（欠席した委員のお手紙紹介）「本日欠席をお詫びするとともに意見の一部を手紙でお伝えする。公園緑地においては、5月末国土交通省から各種の提言及び事例などが提示されており、台東区でも上野公園のスタバ出店以降、多くの公園で商業施設の出店が公園の地域活性化に貢献している。また、広場機能を有する公園の整備、公園や図書館などの公共施設の駅前配置により、大きな交流人口の増加を生み出している。

台東区では、木密地域などに対する震災対応とともに、子育て層の新たなライフスタイルを牽引する、台東区の資源を活かした新たなまちづくりが必要である。また、NPO活動の活性化、それらの若い居住者を支える各種のコミュニティ支援、特に学校などを拠点とした取組が必要である。」

【委員長】次に資料1-1、4～5ページについて、ご意見、ご質問をお願いしたい。

【委員】資料1-1、4ページの「まちづくり施策の視点について、都市基盤の整備のみならず、街の質や機能の向上の視点についても付加」は新たな都市基盤の整備ではなく、既存の都市施設の質の向上を意味するのか。

【委員】資料1-2の18ページの細街路の分布をみると、谷中地区は細街路の道路率が高く、空地が少ない。御徒町駅の場合も駅前広場を整備する空間がなく、そのための区画整理を必要としている。緑被率は全体的には高い傾向にあるが、それは上野公園の影響であって、上野公園を除外すると低くなる。

【事務局】資料1-2の19ページ以降の細街路やバリアフリーなどが該当する。

【委員】資料1-2の26ページに緑被率の情報がある。

【事務局】資料1-1、5ページの部門別整備方針の全体の改定の考え方にも同じ表現を用いている。一部に特化した話ではなく、全体的にいろんな側面で質の向上を図りたい。

【委員】全体にかかる話だからこそ、表現を明確にした方がいい。

【委員長】部門別のフレームは現行都市マスの4章を維持するのか。

【事務局】部門別については、3つの新たな視点を取り入れることで現行とは異なるフレームになると考える。

【委員長】現行都市マスの構成にこだわっているわけではないのか。

- 【事務局】こだわってはいない。
- 【委員】議論の進め方については、部門別検討から地域別検討ではなく、逆順の方が議論しやすいのではないかと。台東区の場合、地域の議論を積み上げて全体の議論に落とし込んだ方が議論しやすい気がする。
- 【委員】強い中心性や都市構造について議論するより、地域の議論をして他地域との連携を図っていくというイメージに近い。
- 【委員】台東区には上野・浅草の二大拠点があるが、その他地域もすべて地域特性が異なる。一概に台東区という括りでまとめると皆が迷惑するかもしれない。ある程度エリアを区切ってそこに合った形の都市計画を個別に検討したほうがいい。従来の都市マスの構成は、行政中心の分類（担当課別分類）と理解している。
- 【事務局】土地利用の方針を先に検討するために、資料の順番となっているが、ご指摘通りに順番を変更する。
- 【委員長】第2回の策定委員会では、地域別整備方針について検討する。
- 【委員長】引き続き資料1-1の6～8ページについて、ご意見、ご質問をお願いしたい。
- 【委員】重点地区の考え方ははたして必要か。23区で一番小さな区であり、各地域の個性も強い。無理に重点地区を指定する必要はない。
- 【委員】現行都市マスに住民と協働したまちづくりの推進を位置づけ、各地域にまちづくり協議会を設置しているが、あまり進まなかった経緯がある。地域の課題解決のためには、重点地区は必要と考える。委員のご指摘の通り、住民主体との整合には課題がある。
- 【委員】手法的にモデル地区を選定し、成功事例をつくれれば他の地区も追随してくるという考え方として理解した。
- 【委員】6地域別に協議会が存在するのか。また、その協議会にて重点地区別にまちづくりについての検討が行われているのか。
- 【委員】谷中地区、上野・御徒町地区（複数）、浅草地区には既存の協議会が存在する。ただ、浅草橋・柳橋地区、台東・小島・鳥越地区には協議会が存在しない。また、根岸・入谷地区、北部地区は休止状態である。
- 【委員】北部地区は面積が狭いが、この小さな地区で新たな組織をつくるのか。
- 【委員】重点地区のまちづくりの実現にあたっては、ステークホルダーが必要であるため、組織づくりは必要である。
- 【委員】従来の都市マスは抽象的すぎて、実施のまちづくりに活かすことが難しかった。重点地区が決まると連携が取りやすくなると期待する。
- 【委員】重点地区に含まれない地区はどうするのか。
- 【委員】地域別整備方針に方針を記載する。
- 【委員長】地域別整備方針で全域をカバーすると理解した。
- 【委員】重点地区の記載は選定結果のみなのか、それとも重点地区別計画や方針も記載するのか。
- 【委員】実際動きがある地区もあるため、書けるところまで書きたい。動きのない地区については議論を重ねてどこまで書けるかを決めていきたい。
- 【委員長】重点地区をどういうふうに動かしていくかについては、都市マスの最後の実現方策で記載することも考えられる。従来の都市マスはどの事例も実現方策が弱い傾向にある。実現方策、すなわち進め方の具体的なイメージは地域別整備方針に記載するのではなく、実現方策で記載したらどうか。その方が計画として使いやすい。
- 【委員】浅草地区はスカイツリー建設がきっかけとなり、まちづくりビジョンを策定した。上野・

御徒町地区や谷中地区も検討中である。このような動きをふまえて、委員長の提案を前向きに検討したい。

【委員長】取ってつけた最終章は空しい。実質的にまちづくりが動くような章にしてほしい。

【委員】行政の計画として書き込みすぎると拘束されてしまう側面もある。もっとダイナミックに、状況に応じて変えていくほうがいいと思う。都市マスには仕組みや進み方について記載し、詳細の計画までは記載しないほうが無難である。

【委員】実施主体など、主語をはっきり書く必要がある。主語がないと、計画は絵に描いた餅になってしまう。

【委員長】具体的なプランまで書くイメージではない。要は仕組みである。

【委員】地区計画のない場所が重点地区に入るケースもある。都市マスで大きな方向性を示し、具体的な整備計画までは記載しないイメージである。地区計画の方向性レベルまで書けるとよい。

【委員長】そこまで話が進んでいる場所があれば記載してもよいと考える。地域の実情に応じた柔軟な対応が必要である。

【委員長】資料1-1の6ページ辺りは従来の都市マスにはなかった内容である。もっと先を読めばこんなことも必要というアイデアがあればぜひ提示してほしい。

【委員】多様性の向上に外国人も対象になるのか。文化行政は台東区としても必要である。無理に入れる必要はないが、関連する課題が台東区にありそうな気がする。

【委員】人口構成では外国人はあまり増えていないが、中国人が経営する中華料理店が多いこと、（委員長との事前視察の際に）南部のとある公園で遊んでいる外国人の子供グループを見かけた経験などを考えると、外国人が多い実感はある。

【委員】区の中でもあまり詳しくない地域もある。例えばおかず横丁に位置するマンションの居住者の属性はどうなっているのか。新住民のイメージがわからない。

【委員】既存の調査はないか。

【委員】調査がないなら、肌感覚でわかる内容でもよい。

【委員】ワンルームマンション建設も増えたこともあり、個人的には独身者が多い印象がある。

【委員】都営大江戸線の新御徒町駅周辺は、駅開業後マンションが立ち並び、佐竹商店街周辺の旧住民と新駅周辺マンションの新住民が共存している。

【委員】おかず横丁で住民主体のワークショップを開催したことがある。大型スーパーが栄えて、商店街の個人商店が衰退する現状について地域住民と話し合った。通勤の利便性を重視し共働きをしているライフスタイルの人は、商店街は閉店時間が早いと買い物ができず、土日にスーパーでまとめ買いする傾向はある。そのようなニーズの変化もあり、おかず横丁でも野菜中心の有名レストランが入ったりして変化が起きている。

【委員】我々区民も自分が住んでいる地域には詳しいが、よその地域には詳しくない。一回区域を回ったほうがいいかもしれない。視察ができないなら、地域の写真のスライドを見ながら議論するなど、工夫していただくと議論がしやすくなる。

【委員】まちの空間自体（ハコ）は土地鑑があればわかると思うが、その中身がいまいちわからない。それに関する情報提供があるとより議論が進む。

【委員】基礎調査で重点地区別の属性分析は行っていないか。

【事務局】行っていない。今年度の意識調査で、地域別住民の意識はクロス集計により把握できるが、それ以上の情報は把握できない。

【委員】センサスの町丁目別データを整理して、人の中身を想像することも考えられる。

【委員】外国人居住者数は増えていないかもしれないが、彼らは国籍、宗教関連でコミュニティ

ががちり形成されており、強硬な結びつきがあるため、強い目立つ。一方、日本人はコミュニティが脆弱だから目立たない。

【委員】おかず横丁で若い人から聞いた話によると、単身世帯は商店街の閉店時刻が早すぎて平日買物ができないらしい。おでん種の売り方にしても、顧客のニーズの変化に対応できておらず、自炊しない人向けのパックにしないと売れない状況である。人口が増えても商店街が顧客のニーズに柔軟に対応できないと衰退する。

【委員】上野、浅草の拠点性の向上自体には異論がないが、二大拠点の拠点性の向上により他地区でのまちづくりの活性化に波及効果が発揮できるのか、本当にそういう構造になるのかについては疑問がある。むしろ上野、浅草に頼らないほうがいいのかも。谷中と上野は客層も違うと予想する。都市構造を決めつけすぎず、もっと議論すべきと考える。背景はあるのか。

【事務局】上野地区については、まちづくりビジョンを策定中であり、区としても支援したい。

【委員】同じ上野地区でも高速道路を隔てた昭和通りの向かい側の東上野エリアは元気がない。台東・小島・鳥越地区の場合も、上野・御徒町地区から昭和通りを超えると急激に路線価が下がる。そういう意味では、上野は拠点性をさらに向上したほうがいいのか。

【委員】「上野・浅草＝副都心」の幻想のなごりもある。

【委員】二大拠点の大きな構図は変わらないにせよ、台東区の都市構造についてももう少し柔軟に捉える議論があってもよい。

【委員】上野～秋葉原をよく一括りにするが、御徒町と秋葉原は歩くには遠い。

【委員長】上野が副都心として生き残れるようにすることについて議論があるのか。

【委員】東京都で2040年の都市像の中間報告を公開している。オリンピック開催で臨海部の開発が進むと、副都心という考え方を見直す必要があるという見解である。また、都市構造の中心も東京湾寄りに移動すると予想する。台東区としては上野、浅草を副都心に残したい思いがある。

【委員】資料1-2の37ページの東京副都心の機能集積の状況をみると、上野は拠点機能が落ちている。上野が錦糸町にも負けている結果には愕然とした。

【委員】数字だけで判断すると誤るおそれがある。ベクトルの方向性が違うもの同士を比較しても意味がない。

【委員長】上野の拠点性の方向性は大崎とは異なる。ベクトルが違うため、違う方向を目指す必要がある。

【委員】昔の副都心の考え方は交通の拠点という性格が強かった（例えば新宿、渋谷）。今の時代は交通という尺度だけで判断できない。昔は上野駅に交通ターミナル機能があったが（始発の存在）、今は東京駅にその機能がシフトしている。しかし文化面で上野は日本の中心であり、世界の中心にもなり得る。

【委員】ホテルなど観光に携わる機能を整備する方向性も考えられる。地域特性に合った業務機能や製造業などの中身の工夫が必要である。

【委員】上野らしい拠点性の定義が必要である。

【委員】上野と丸の内を比較しても意味がない。

【委員長】全体として言い残したことがあればお願いします。

【委員】資料1-1の5ページに将来都市構造について示していくという記載があるが、現行都市マスにも平成18年から20年後の将来像が示されている。そこから10年が経って、

今後の将来像をどういう方向に変えていくのかについて議論する必要がある。

【委員】 現行都市マスが前提となるが、個々の部分の色が濃くなったり、色が少し変わったりすることがあるかもしれない。そこが今回の都市マス改正の意義にもなる。

【委員長】 次回は地域別整備方針について検討する。意見があれば随時事務局に連絡をお願いする。本日の議事はこれで終わりとする。

## (2) その他

【事務局】 次回の委員会は10月14日（金）午前10時から、区役所10階研修室にて開催予定である。詳細は後日改めて連絡する。内容は地域別整備方針を想定しており、本日のご意見を参考にして資料を作成する。

## 6. 閉会（省略）

以上